



川崎道民

幕末維新期

白石偉人伝



鍋島茂真

幕末から明治維新期の動乱の中、
その荒波を巧みに乗り越え、
歴史に名を残した偉人がいました。

白石偉人伝

鍋島茂真

藩主直正の右腕

【藩主直正の右腕として手腕を発揮】

鍋島茂真は、9代藩主鍋島^{なりなお}齊直の十四男として文化10年(1813)、佐賀城で誕生しました。(10代藩主直正の異母兄)

9歳の時から文武稽古を始め、佐賀藩の藩校である弘道館^{こうどうかん}へ通い勉学に励み、文政8年(1825)に、現在の杵島郡白石町の須古^{すこ}を本拠地とする須古鍋島家を継ぎました。

勤勉な性格で直正から信頼が厚かった茂真は、天保元年(1830)、藩主に直正が就任するとまもなくして、藩の請役^{うけやく}(行政全般の担当)である鍋島茂順^{しげより}(武雄鍋島家)の補佐役となり、この頃から藩政に大きく貢献するようになります。

そして、天保3年(1832)には弘道館^{とうにん}の頭人(トップ)、同6年(1835)には、行政府のトップである請役当役^{とうやく}を命じられました。この時のことを、藩主直正の藩政改革を支えた古賀穀^{こく}堂^{どう}は、日記で「須古貴介公子、少年英気、学問の力大いに進む。喜ぶべし」と称賛しています。

こうして茂真は、藩主直正の右腕として藩政をリードしていくこととなります。

【須古鍋島家と茂真】

須古鍋島家は、佐賀藩内の重臣の一つで、家格は親類同格であり、3代茂周^{しげかね}の時代に鍋島姓を許されました。13代茂臣^{しげとし}に男子がいなかったため、9代藩主齊直が鍋島茂真を領主に指名しました。

「藩主には及ばないが勉強熱心で学問の力もある」と評され、学問を重要視していた



鍋島茂真肖像(公益財団法人鍋島報效会所蔵)



扁額「三近堂」(白石町立須古小学校所蔵)

として手腕を發揮 【文化10年(1813)～慶応2年(1866)】

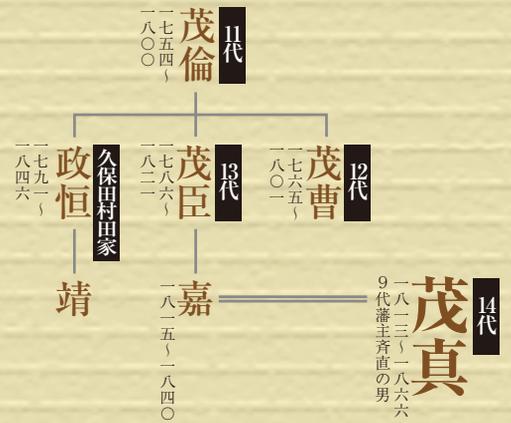
茂真は、須古鍋島家の「学館」を増築し、名称も「三近堂」と改名し、更に力を入れました。

茂真の学問への取り組みや勤勉さは、「貧富の差もなく、弘道館では皆が机を並べ勉学に励んでいる。また、役所には朝6時から出勤し、退勤するとすぐに弘道館にも顔を出すほど熱心である」と記されています。

現在、白石町立須古小学校に残る扁額「三近堂」は、古賀穀堂が揮毫したものです。

このように、地位や身分にかかわらず等しく教育し、佐賀藩が幕末から明治維新へと激動する日本を支えていく優秀な人材を数多く輩出したのは、鍋島茂真の力に負うところが大きかったのです。

須古鍋島家系図



三近堂で使用された教科書？

三近堂の校訓は「知・仁・勇」です。これは中国の古典『中庸』から引用したもので、「学問(知)、実行力(仁)、思慮深さ(勇)を身につけた立派な人材を育成する」という意味を込めているものです。

その三近堂で使われていたのではないかとされる書物が残されています。それは水戸藩が編さんした『大日本史』です。その第1巻を開くと「清陰所蔵」という印が押されています。「清陰」とは茂真の号で、彼が所蔵していた冊子がきれいな状態で保存されています。歴史的な検証があるわけではありませんが、教育熱心であった茂真がこれを教科書として使っていたということも考えられる、大変貴重な資料です。



茂真が所蔵した『大日本史』

参考文献 公益財団法人 鍋島報効会 編『幕末佐賀の家老たち』 平成28年
小林 智 著『佐賀須古屋敷日記』 平成25年
池田史郎 著「佐賀城と佐賀城下町の形成」『佐賀藩研究論巧 池田史郎著作集』 平成20年
藤野保 編『佐賀藩の総合研究』 昭和56年

なべ しま しげ まさ
鍋島茂真 年表

西暦

和暦

できごと

- | | | |
|------|--------------|---|
| 1813 | 文化10年 | ・第9代藩主鍋島齊直 <small>なりなお</small> の十四男として佐賀城で出生 幼名は長之進 <small>ちやうのしん</small>
・9歳で文武稽古を始め、藩校弘道館 <small>こうどうかん</small> へも出入りする |
| 1825 | 文政8年 | ・須古鍋島家を継ぎ、第14代領主になる
・「花杏葉紋」 <small>はなぎようようもん</small> を一代限りで拝領する
・直正 <small>ちやっごく おし しゃ</small> の着国御使者を務める |
| 1829 | 文政12年 | ・幼名の長之進から茂真に改める |
| 1830 | 文政13年 | ・鍋島直正 <small>なおまさ</small> が第10代藩主になる |
| | 天保元年 | ・藩の請役 <small>うけやく</small> (行政全般の担当)武雄鍋島家第14代当主鍋島茂順 <small>しげより</small> の差次 <small>さしつき</small> (代理補佐)を命じられる |
| 1832 | 天保3年 | ・藩校弘道館 <small>とうにん</small> トップの頭人に任命される
・須古鍋島家の「学館」 <small>がっかん</small> を拡張し、名称も「三近堂」 <small>さんきんどう</small> と改める |
| 1835 | 天保6年 | ・佐賀城二の丸が焼失
・藩行政府のトップである請役当役 <small>とうやく</small> に就任する
その後およそ30年にわたり直正の右腕として手腕を発揮する |
| | | ・御仕組所 <small>おし くみしょ</small> (役所)兼帯となる |
| 1839 | 天保10年 | ・直正から弘道館の移転を命じられ、佐賀城三の丸の一部を移築し、講堂とする |
| 1840 | 天保11年 | ・弘道館改築のため瓦1万枚を献上する
・弘道館が北御堀端小路 <small>きた おほりばた こうじ</small> に拡張・移転され、新校地で開講
・岩田台場(神埼郡)で武雄鍋島家の砲術演習を視察する |
| 1844 | (天保15年) 弘化元年 | ・直正の代理で、長崎の御台場を視察する |
| 1849 | 嘉永2年 | ・長年の請役当役としての功績が認められ、「花杏葉紋」を代々拝領する |
| 1851 | 嘉永4年 | ・請役相談役の池田半九郎 <small>はんくろう</small> に伊王島 <small>いおうじま</small> と神ノ島 <small>かみのしま</small> ・四郎島 <small>しろうじま</small> に台場(両島台場)築造を命じる |
| 1853 | 嘉永6年 | ・ペリーが浦賀に来航する |
| 1854 | (安政元年) 嘉永7年 | ・両島台場築造の功績で直正から鞍鐙 <small>くらあぶみ</small> を拝領する
・直正と藩重役による会議録『御目通并公用諸控』 <small>おめ どうりならびにこうようしよひかえ</small> を記す |
| 1866 | 慶応2年 | ・逝去 54歳 墓所は白石町の陽興寺 <small>ようこうじ</small> |

【10代藩主直正を撮影した藩医】

川崎道民は、天保2年(1831)、佐賀蓮池藩の藩医・松隈甫庵の四男として生まれました。後に須古鍋島家の侍医であった川崎道明の養子となり、10代藩主鍋島直正らの勧めにより長崎で蘭学を学び、佐賀藩医となりました。

道民は藩医でありながら、生涯を通して、写真術や新聞、ジャーナリズムにも関心を寄せています。特に写真として有名なものが、安政6年(1859)に江戸藩邸で撮影した藩主直正の肖像写真(右下)で、これが私たちのよく目にする藩主直正の肖像です。

【二度の海外派遣から学んだジャーナリズム】

一度目の海外派遣は、万延元年(1860)で、幕府がアメリカに日米修好通商条約批准書交換のために派遣した使節団に医者として参加しています。その際、警護などのために随行した「咸臨丸」には勝海舟や福沢諭吉なども乗船しています。

アメリカに渡り各地を見聞して回った道民は、フィラデルフィアの医科大学で膀胱結石の摘出手術を見学した際に、土産として外科の教科書と手術道具を贈られました。これが日本の医学、近代外科への発展に繋がっていくこととなります。

また、ニューヨークの写真館で銀板写真技術を学んだ道民は、写真機を日本に持ち帰ることになり、これが道民の日本でのジャーナリズム活動(新聞の発刊)のきっかけとなりました。



川崎道民肖像写真(貞松和余氏所蔵)



鍋島直正肖像写真(公益財団法人鍋島報効会所蔵)

二度目の海外派遣は、2年後の文久2年(1862)、幕府がヨーロッパに派遣した使節団に再び医師として参加しています。そこで目にしたのが、アメリカでも目にした新聞でした。紙面には毎日、遣欧使節団の動向が掲載されるなど、迅速な情報の伝達には新聞が重要であることを実感したのです。

こうして、二度にわたる海外派遣で様々な経験と知識を吸収した道民は、帰国後も精力的に活動します。

明治5年(1872)、長崎から活版印刷機や文字盤などを購入し、「佐賀県新聞」を発刊しました。これは、国内初の日刊新聞である「横浜毎日新聞」に次ぐ速さです。

医者であった川崎道民はまた、日本におけるジャーナリストの先駆者の一人ということが出来るでしょう。

鍋島家の菩提寺に眠る道民

二度の海外派遣で様々な文化に接し、西洋の技術をいち早く採り入れた道民は、芸能や学校教育にもかなり力を入れていたようです。実際、明治5年(1872)には上方(大阪)から芝居一座を呼び寄せ、現在の佐賀市柳町で芝居を興行したり、明治6年(1873)には学資献金寄付(50円)をしたり、外国語の単語編出版願いを提出するという活動もしています。

また、海外派遣で知り合った勝海舟や福沢諭吉、ジョン万次郎、さらには、早稲田大学を創設した大隈重信などとも交流が深く、彼らと日本の近代化について熱く論議を交わしました。

幕末の動乱期に多方面で活躍した川崎道民は明治14年(1881)年、51歳でこの世を去りましたが、藩主直正の信頼を得ていたことから、墓所は初代藩主鍋島勝茂が建立した東京都港区元麻布の賢崇寺にあります。



賢崇寺に眠る川崎道民(左)と父道明

かわ さき どう じん
川崎道民 年表

西暦	和暦	できごと
1830	(文政13年) 天保元年	・鍋島直正 第10代藩主となる
1831	天保2年	・佐賀蓮池藩医松浦甫庵 <small>ほ あん</small> の四男として現在の佐賀市で生まれる ・須古鍋島家侍医・川崎道明 <small>じ けい</small> の養子になる ・佐賀藩校弘道館に入学する ・長崎で蘭方医学を学び、佐賀藩医となる ・漢学者・砲術家の大槻磐溪 <small>おおつきばんけい</small> の家塾に入門する
1858	安政5年	・日米修好通商条約締結
1859	安政6年	・江戸の佐賀藩邸(溜池邸)で藩主直正を撮影(ガラス湿板)する
1860	万延元年	・日米修好通商条約批准書交換を目的とした幕府の遣米使節団に医師として随行する ・ニューヨークのブレイディ写真館で銀板写真術を学ぶ ・帰国に際し、アメリカから写真機、医学書、手術道具、物理学書、測量書、香水などを持ち帰る ・渡米時に得た情報を『航米実記』 <small>こうべいじつき</small> 上、中、下にまとめる
1861	文久元年	・大槻磐溪 <small>おおつきしゅうじ</small> 、大槻修二を撮影する
1862	文久2年	・幕府の遣欧使節団に医師として随行する (この渡航では直正からヨーロッパでの情報収集の命を帯びる)
1872	明治5年	・芝居興行願(現、佐賀市柳町)を出し、上方から芝居一座を呼ぶ ・佐賀県令(知事)に「新聞活版所開業願」を提出する ・『佐賀県新聞』を発行するも2ヶ月で廃刊。活版印刷活動はその後も継続する
1873	明治6年	・学資献金寄付を行う ・「単語篇出版願」を提出する
1874	明治7年	・佐賀の乱が起こる ・活版機器(文字盤、機械)購入のための借金を願い出る
1881	明治14年	・逝去 51歳 墓所は東京都港区元麻布 <small>けんそうじ</small> の賢崇寺

杵島郡須古郷図



佐賀県立図書館蔵「杵島郡須古郷図」から部分抜粋(請求番号 郷0578 受付番号60) 無断転載・複写を禁じます。

「直正の右腕」と言われた鍋島茂真。「ジャーナリストの先駆者」と言われた川崎道民。二人は同じ須古という土地で大きく成長し、幕末維新期の日本を牽引する人物になりました。私たちの故郷・白石町にこういった偉人がいたということは私たち白石町民にとって大きな誇りです。

編集・発行／白石町(佐賀県杵島郡白石町大字福田1247-1)
発行日／平成30年12月28日

お問い合わせは

企画財政課政策推進係 TEL 0952-84-7112(直通)
教育委員会生涯学習課生涯学習係 TEL 0952-84-7129(直通)